古高取通信

No.3

平成21年 5月

古高取を伝える会会報

目 次

古高取の魅力を伝える……2
役員体制……2
活動の四本柱……2
新任の挨拶……3
平成21年年間スケジュール……4
古高取の広場……5
活動の記録……6
なんでも掲示板……6

「古高取を伝える会」が船出して一年が経ちました。そして、大波小波を乗り越えながら、会員の皆様のお力添えをいただいて数多くの催事をこなしてまいりました。おかげさまで充実した活動ができたと自負しております。特に市内の小学校六年生対象の焼物教室は、活動計画の中の一つ「次世代へつなげる」という取り組みで、古高取を誇れる子供たちを育てていく重要な活動です。この一年関わってきて、子供たちの目の輝きや、古高取に関する講義を受けているときの熱心な表情に感動しました。

これからも、市内十一校を巡り、先生や子供たちと楽しく交流し、抹茶茶わんの制作や、直方が高取焼の発祥の地であることの授業を通じて、子供たちが古高取への関心を深めてくれることを願っています。そして、子供たちが大人になり、またその子供たちに、古高取が直方の宝であることを、語り伝えていってくれることが、この会の目指すところと言えましょう。

子供たちの焼物教室や直方谷尾美術館での「古高取展」がメディアで大きく報じられ、この会がとても有名になってきたことを大変うれしく思っています。

永富 セツ子

古高取の魅力を伝える

『未来へつなげよう古高取』

会長　能間瀧次

「古高取を伝える会」の皆様には本会の事業にご支援・ご協力を賜り心から御礼申し上げます。

昨年三月に本会が発足し一年が経過いたしました。その間、子供焼物教室では直方市内１１校の６年生を対象に古高取の授業と茶碗作りを行い、子供たちの創造力・表現力に驚かされました。特に子供一人一人の目の輝きは忘れることができません。学習部会では、直方発祥の高取焼きについて、知識を深め郷土の誇りである古高取を理解していただこうと各種講演会、学習会を行うことができました。特に９月に実施しました直方谷尾美術館での「直方の宝　古高取展」は多くの来場者に支えられ、魅力を発信することができました。内ヶ磯窯跡からの出土品、古高取の作品等貴重な展示品に触れる楽しさは格別のものでした。広報部会では、地道な活動が要求されますが、古高取通信の発行・ホームページの充実・パンフレットの作成等着実に本会の宝を蓄積しております。さらに、「古高取窯跡探訪紅葉ウォーキング」「チューリップフェアでの呈茶会」「イオンモールでの親子焼物教室」等、実施することができました。多くの皆様のお力添えに感謝致しております。

２年目を迎えた本会は昨年の取り組みを参考にしながら、より充実した内容になるよう役員会などで検討をしているところです。特に本会の活動の重点であります４本柱を昨年以上に深めていくことです。

１つは、活動の拠点をつくる。
２つは、古高取の知識を深める。
３つは、古高取の魅力を伝える。
４つは、次世代へつなげる。

以上の４つの柱を基に、各種事業を計画し積極的に取り組んでいこうと思っています。

高取焼発祥の地に生まれ育ったことを誇りにして、多くの方々と直方の文化の継承・創造・発展に寄与することができたらと願っています。

今後とも、古高取を伝える会へ、ご支援・ご協力を賜りますようどうぞ宜しくお願いいたします。

「古高取を伝える会」のパンフレットが出来ました！

役員体制

役員は左記のとおり選出されました。

会長	能間瀧次
副会長	鷹取宗恵
	永富セツ子
理事	梅本靖
	荻迫喜代子
	小山亘
	（新）副島邦弘
事務局長	（新）隅田知明
書記	末松登志子
会計	（新）吉田佳代子
監事	有吉輝祐
	東陽一

活動の四本柱

今年度も引き続き左記の四つを活動の柱として、会を運営します。

一．活動の拠点をつくる
二．古高取の知識を深める
三．古高取の魅力を伝える
四．次世代へつなげる

新任の挨拶

湖底の窯跡に想いを馳せる

事務局長　隅田　知明

内ヶ磯窯跡の存在を知ったのは、福智山ダム建設事務所に勤務した折だった。

発掘調査報告書や古高取の資料を見て、数々の名品が内ヶ磯窯で焼かれたことを知った。東京の国立博物館で内ヶ磯窯発掘品の展示に感動したことも思い出す。

高取八山を主人公にした「八山炎の旅立ち」を直方市民劇で公演したのはその頃だった。

高取焼発祥の地に博物館の一つはあっていいのではないかと言う思いと、ダム建設により、窯跡を湖底に沈めた責任の一端を担った苦い思いが、「古高取を伝える会」参加の動機でもあった。

焼物戦争とも呼ばれる、秀吉の朝鮮征伐の折、日本に渡来した朝鮮陶工たちが、日本文化との融合の中で生み出した、古高取の歴史に想いを馳せながら、「伝える会」の活動が直方のまちづくりに少しでも力になればと願う。

～・～・～・～・～・～・～

美のあり方

学習部会長　副島　邦弘

古田織部はよく古い器物をわざとこわしてこれをつぎ合わせたり、填めものをしたり、古代ぎれを切りくだいて、他のきれとはぎあわせたりした。これは利休によって発見された美の意志を全く無視し、新しい美の創造であり、現代風に言うとファッション性を強調したものであった。

織部のひたむきな芸術家気質にも感心するが、彼は実に美に殉ずる人でもあった。こういうひたむきな態度こそ必要となる。

利休がもとめていた美は、オーソドックスな、健康な美であった。ただ、美は刺激の一種であるから、たえず変化を要求する。利休の天分は随時随所に新しい美を発見し、創造したものであるが、それはあくまでも本道的な健康な美であったことを織部は知らなかったと思われる。

織部は実際の製作に当って自らは指示せず、陶工に自由自在に創作させ、自らはその良いものを選択して取り合わせるコーディネーターとして采配したものである。

その後の茶の湯はへんにかたまり、わくにはまったものになっていったと小生は考えている。

～・～・～・～・～・～・～

「灰かぶり」に魅せられて十年

広報部会長　小山　亘

初めて内ヶ磯窯の発掘出土品に出会った瞬間、そのすごさに圧倒され、それまで学んでいた備前焼と技法の共通点があまりに多いことに驚いた。

燃料の薪の灰による灰かぶりの窯変もそうである。

同じ陶工が係わっていたのではないかと興味を持ち、だんだんとのめりこになっていった。

近年の京三条界隈の発掘調査の結果、内ヶ磯窯で焼かれた茶陶も当時焼かれていた備前焼も京三条「せともの町」で売られていたことが明らかとなっている。

十年かけて研究を進めてきた成果として、私は内ヶ磯窯は「天下一の織部大窯」で、大窯造りの弥之助が考えだした窯であると思う。

まだ未知の部分も多く、広報の多様的な活動で皆様の意見が交差し、高取焼の魅力がさらに深まるものでありたいと考えている。

平成２１年（２００９年）年間スケジュール

月	全体行事	学習部会	広報部会	焼物教室部会	その他 関連行事
4					
5	１７日（日） 定期総会	１７日（日） 講演会（小山亘）	会報３号発刊		３０日（土） 蛍と小さな音楽会
6	理事会（１）	２７日（土） バスハイク （秋月美術館）		小学６年対象 焼物教室	
7	理事会（２）	１８日（土） 高取焼基礎研修 講座（第１回）	標識設置		
8	理事会（３）	２２日（土） 高取焼基礎研修 講座（第２回）		３０日（日） 焼物教室 上境地域活動 「おしゃべり喫茶」	
9	理事会（４）	１９日（土） 高取焼基礎研修 講座（第３回）	会報４号発刊	小学６年対象 焼物教室	
10	理事会（５）、 直方の宝 「古高取展」	１７日（土） 高取焼基礎研修 講座（第４回）			
11	理事会（６）、 ２２日（日） 紅葉 ウォーキング	総括研修 講師（日隈精二）		1日（日） 焼物教室（１）	
12	理事会（７）			焼物教室（２）	
1	理事会（８）		会報５号発刊		
2	理事会（９）			焼物教室（３）	
3	理事会（10）	古高取伝世品 マップ作成、 学習研修の成果 発表会	古高取探訪 マップ作成		

古高取の広場

黒田忠之と高取焼

副島邦弘

前回は古高取様式の区分ついて述べましたが、今回は二代藩主黒田忠之と高取焼の関係についてお話しをしましょう。

初代黒田長政は元和九年（一六二三）七月、父二代将軍秀忠と三代将軍となる家光の襲職した供奉のため上洛であったが同地で病状を悪化させ、八月四日に、京都報恩寺で没し、嫡子黒田忠之が二代藩主として家督相続している。この時、徳川将軍家は家光が三代将軍となり、父秀忠は大御所として西丸にはいっていて、隠居している。

将軍も代替わりして、弱冠二〇才の家光が就いている。黒田忠之はこの時一才上の二一才で、若き将軍と若き藩主の間柄であった。

忠之は茶の湯に執心を持ち、道具を集めていた。その茶の湯の道具立てとして、高取焼の成立とブランド化をはかっていた。

黒田 忠之 像

そこに登場するのが将軍家の茶匠としての小堀遠州の存在で、彼は伏見奉行に就任していた。遠州は陰になり日向になって、若き忠之を助けていたと考えられる。

すなわち、小堀遠州主催の茶会の折に、筑前（高取）を使用して、名を高めていったのである。

茶会記では、寛永六年（一六二九）四月二十三日（四十七会）筑前焼茶入・四月二十四日（四十八会）筑前焼水指・四月二十六日（五十会）筑前焼水指・五月一日（五十一会）朝筑前焼水指・五月一日不時（五十二会）筑前焼水指・九月八日（六十会）筑前焼耳付茶入・九月十一日（六十一回）筑前焼肩衝茶入・九月十六日（六十四会）筑前焼茶入・九月十七日（六十五会）筑前焼茶入・九月二十八日（六十六会）筑前焼茶入を使用している。

この状況から考えると、その製品は内ヶ磯で焼かれたものと考えられるわけで、白簇山の窯は築窯がはじまった時期でもあった。

寛永七年（一六三〇）に白簇山に窯場全体移動し、内ヶ磯窯を放棄したということになるが、その時、長政の遺言によって、元和九年（一六一四）には、忠之の弟の高政の東蓮寺藩領となっている。内ヶ磯窯の本体は使用可能ではなかっただろうか、疑問が生まれてくる。

隣国の筑後国久留米藩家士の記録に次の様に記述されている。

すなわち、『石原家記』の中で、寛永三年（一六二六）と、寛永七年（一六三〇）に関連の記事である。

寛永三年（一六二六）
・筑前国東蓮寺域四万石長政公
李子隆政公御分地　右は寛永元年御領之處相済当地御引移

寛永七年（一六三〇）
・筑前国穂波郡今屋焼物出来之朝鮮軍之時加藤清正連来給ふ由慶長ノ頃同郡内ヶ磯ニテ焼候当年此所へ移ル

と、このことも傍証例となってくる。

いわゆる「高取歴代記録」について、考慮されて、中身の吟味が必要となってくるわけである。

唐物茶入 銘 博多文琳
福岡市美術館 特別企画「大名茶陶－高取焼」展図録より

活動の記録

第二回 学習会「内ヶ磯高取焼への道程」

〈平成二十一年二月十五日（日）〉
場所：直方市中央公民館三階
第三学習室
講師：日限精二氏

多数のご参加ありがとうございました。皆様より頂いたご意見・ご要望等も参考に今後の学習部会等に活かして行きたいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

平成二十一年度 定期総会及び記念講演

〈平成二十一年五月十七日（日）〉
場所：直方市中央公民館三階
第三学習室
記念講演：
「織部好みと古高取内ヶ磯窯開窯」
講師：小山亘氏

出席者四十四名　委任状六十五名

子供焼物教室への高い評価や、古高取のツアーへの期待が寄せられ、今後の活動への大きな励みとなりました。
これからも会員の皆さんの声を真摯に受け止め充実した会の運営に努めていく決意を新たにしました。事務局長の下田氏、学習部会長の梅本氏、広報部会長の石光氏、会計の宮園氏が、一身上の都合により退任されました。一年間頑張っていただき感謝いたします。
小山亘氏の講演は、古高取に魅せられた熱い思いを、参加者に語り、好評を博しました。

なんでも掲示板

山田芳裕の茶道具愛（1）

以前、会報でも紹介した漫画「へうげもの」の著者、山田芳裕氏が読売新聞に「山田芳裕の茶道具愛（1）」と題して、織部好み等の茶道具を紹介する記事を書かれています。
いつか古高取も紹介されると嬉しいですね。

なつかしいチマキの匂い

端午の節句と云えばお供えに作ったチマキがある。日本各地には形も味も色々な形態で伝承されているが、鹿児島のアクマキは最も素朴な原型をとどめていると云えよう。元々は奈良時代に中国から伝わった保存食である。しかし何時のまにか餅がウイロウやクズキリに変化し菓子屋に並ぶようになってその面影はない。
これた団子を数枚のマコモの葉を並べて巻き、シュロの葉の細かくさいたもの（又はイグサ）でくくるのだが今でも手に覚があってなつかしい。
大釜で茹でたての青々としたチマキの緑と胸にせまるマコモのむせる様な匂は忘れられない。高取焼の大皿にドサッと盛り上げ、キナコやどろっとすり上げたゴマ醤油で食べてみたいものである。

荻迫　喜代子

〈掲載内容募集〉
「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。
掲載可能な情報等がございましたら、事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

今年度、「古高取を伝える会」の広報部会長に選任されました小山亘です。広報部会のメンバーは変わりません。今後、活動内容をさらに充実させていきたいので、新メンバーも募集しています。
「直方のお宝」といえる古高取がより多くの方々に親しみのあるものになることを願って、活動に努めて行きたいと思っています。
皆様、ご指導・ご鞭撻の程、何卒、宜しくお願い致します。

「古高取通信」
会報・NO3

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成二十一年五月三十一日

〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL 0949(23)1311